

TBS ラジオ開局 70 周年 Masterpieces (傑作選)

「美空ひばり、インナーレポート人生、泣き笑い」

1985 年 3 月 24 日 20:00-21:00 放送



昭和 60 年 3 月 24 日 (日)

NO. 2

後5	00	サンデー・オレンジハイウェイ	鈴木 順
6	00	牟田悌三の税金相談	牟田 悌三
	15	マイコン・シティ	貴倉 良子
	30	近藤正臣スクランブルナイト	近藤 正臣 ゲスト クラッシュ・ギャルズ
7	00	ラジオマクロス みんなデ・カルチャー	室井 深雪 佐々木 るん 鶴 ひろみ
	30	宮城まり子の人の暦風の暦	宮城 まり子 ゲスト 長部 日出雄
8	00	Ⓜ美空ひばりインナー・レポート 人生、泣き笑い	出演 美空ひばり 筑紫 哲也 中西 龍 川口松太郎 ほか

TBSラジオ95.4

1083

タイトル、鳴き 「美空ひばり、インナーレポート人生、泣き笑い」

♪悲しき口笛 (1949.9 美空ひばり、12歳)

作詞：藤浦 洸、作曲：万城目 正

丘のホテルの 赤い灯 (ひ) も 胸のあかりも 消えるころ
みなと小雨が 降るように ふしも悲しい 口笛が
恋の街角 路地の細道 ながれ行く

(口笛)

(NA=ナレーション) 昭和24年、戦後の混乱期は越えたものの、巷は直江町松川下山三鷹事件が相次いで起きるといふ不穏な空気に包まれていた。

まだ小学生の少女が歌ったこの曲が空前のヒットを放った。

このときからこの少女はスター街道を驀進し、

ついには「歌謡界の女王」とまで言われるようになった。

その名を「美空ひばり」いう。

(街の声) 「あんまりテレビ出ないですよ。あんま親近感がない」

「勝つと思うな、思えば負けよ～あれ、何でしたっけ」

「聞いて懐かしいっていうイメージしかないですね」

「取立てて聞きませんよね。(自分は) 若いし」

「紅白歌合戦で名前を間違えられたりして」「こぶしを聞かさなければいいと思うんですけど」「世代が違うんじゃないですか」

「懐かしい」「私たちの世代には違うのかなって思います。」

美空ひばり芸能生活39年、
あと2年で50歳を迎える。

(美空ひばり) 喉痛めたときに、先生にですね、真剣に聞きましたね。今のように私は何歳まで歌える声帯なんでしょうかって？(筑紫哲也) うん(ひばり) そうすると先生は「人間の顔のしわと同じように、喉にも50代から皺ができてくるからだからその時期に50代になったときにとっても気をつけて大事にしてあげないと」って

やっぱり、でも見えない部分ですからね。(筑紫) ええ、そうですね、(ひばり) 怖いですね。

(筑紫哲也) うん。いつ、ふっと出なくなるがわからないですから…

(NA) 女王美空ひばりも年齢的にある節目を感じているようだ。
そこで彼女に今までの歩みと現在の心境を聞いてみた。

「対談美空ひばり、筑紫哲也」



(写真 朝日ジャーナル編集長時代の筑紫哲也。49歳。「歌謡界の女王」、美空ひばり。47歳。青葉台に竣工したばかりの美空ひばり邸にて。ひばりプロ提供)

(筑紫) 美空ひばりさんっていう人は、こんななに長いこと芸能生活をおやりになっていて、以外にご自分のことをご自分の肉声で喋っておられないですね。さらに調べてみましたら。

(ひばり) 割と用心深かったんです。一度言ったことは「ごめんなさい。ちょっと嘘だった」とは言えないですねもう。この立場になってしまうと、ただ私はあの活字にさせていただくよりね、こうして自分で言葉で皆さんにわかっていただく方が好きですね。

(筑紫) 小さい頃から好きだったわけでしょ、歌を歌ったりすることは。美空ひばりさんという人はそのお母さんのことはあまりにも有名でね、お母さんの方がひばりさんの天分を見つけて歌え、歌えと育て上げたっていうイメージの方が強いですね。そうじゃなくて。一般には。(ひばり) そうですね。そうじゃなくてなんですそれ。私がやっぱり魚屋の娘で、「屋根なし市場」というところに住んでいて (筑紫) 横浜の？ (ひばり) 横浜の。そして近所では、あそこの、魚増さんとこの和枝ちゃんは歌が上手いよって。近所の人呼んではふすまをね、幕がわりにしてね、バーンバーンバーンって、自分で声でね、こうやってちゃんと音を出して幕が開くと歌い出すわけですね。これが近所は狭いですから評判になっ

ちゃった。であるとき興行をやる方が、じゃあ、あの子どもちょっと使ってみようじゃないかって白羽の矢が当たったんですね。それで私のところにそのいいお話が来たんです。もうお袋も私も乗りました。舞台でられるの！えっ、舞台に出られるの！って。横浜の国際劇場でしたね確か。そこに出られるっていうんで騒ぎになったんです。もう、それは胸膨らませてうかがいましたよね。

(NA) この後、日劇小劇場に出ることになり、初めて「美空ひばり」という芸名を名乗る(1947年10月4日。美空ひばり、10歳。命名**岡田恵吉**) 歌手美空ひばりの誕生である。続いて、浅草国際劇場に出演のチャンスをつかむ。しかし悲しいかな、まだ自分の持ち歌がない。(1948年9月16日。11歳) 彼女は、**菊池章子**(1924-2002)の持ち歌「**星の流れに**」を歌った。

(「星の流れに」♪星の流れに身を占って どこをねぐらの今日の宿 荒むころでいるの
じゃないが 泣けて涙もかれはてた こんな女に誰がした
作詞清水みのる 作曲 利根一郎
戦争で身を崩した女性・「パンパンガール」の悲哀を歌った社会派歌謡。
「こんな女に誰がした」の歌詞が有名。)

まだ小学生の少女がタバコを吸う手つきをし、時にはそっと涙を拭うしぐさまでして、
「こんな女に誰がした」と娼婦の歌を歌うのである。
確かに達者ではあった。その達者さが「ゲテモノ」と言われる元にもなった。
(右写真「星の流れに」を歌う美空ひばり。11歳。)



(NA) 評論家、**加藤康一** (1930-1990 芸能レポーターの草分け)

「ゲテモノ」っていう、「気持ち悪いな」って感じ、第一印象も僕なんかもありましたね。横浜宝塚では一世を風靡した**岡晴夫** (1916-1970「東京の花売り娘」「啼くな、小鳩よ」後に「憧れのハワイ航路」。甲高く鼻にかかったビブラートの歌声が戦後の焼け跡にひびき、人々に希望を与えた。)の前座で出ていたんですね。



ところがね、要するにステージなんか立つとね、びっくりするわけね、大人たちがね、劇場当時の劇場に集まったお客拍手喝采でしょ。それでね、岡晴夫がね、嫌がって、あれが先だと俺はやりにくくてしょうがないと、あれを

おろさなきや俺が降り降りてしまうみたいなのがあったりするくらいに人気でしたけどもその人気というのは、なんだか「すごい少女だね」「すごい怖い女の子だね」という印象だったろうな。

(NA) 作家、**川口松太郎**。(1899-1985 昭和を代表する作家、劇作家。この対談の3か月後に亡くなっている。)

「ひばりばかりでなくってね、新しく出てくる人を見るとね、なんか一癖、難癖をつけてやろうというようなね、意地の悪さっていうものがね、あるんだよ、世間にはね。そうでなくだね、もっとその人の才能なりね。持っているものをちゃんと見てやればいいけどね。なかなか難しいんだね。」

(NA) 「ゲテモノ」とは言われたが、また一方には**伴淳三郎**(1908-1981)、**川田晴久**(1907-1957)などの味方もいた。

(筑紫哲也) 美空ひばりさんの場合はその前のお手本みたいなものがほとんど感じられないんですよね。(美空ひばり) そうですね。だから昔の歌を、自分の歌を聞いてると、ああ、私はこの人(自分)に負けてはいけないと思います。それだけです。(笑) だから誰を追い越していかうかとかという、そういうのがなかったんです。だから、かえって悪かったんですかね、それは。でも自分で選んだ道ですから、誰も恨めないんですよね。それで、お母さんも恨めないんですよね、自分が歌いたって言ったんですから。

♪ 東京キッド (1950年7月。美空ひばり13歳)

作詞 藤浦洸 作曲 万城目正(1905-1981 1949年の「悲しき口笛」から1964年まで15年間、美空ひばりの青春時代のヒット曲を何十曲も作曲)

歌も楽しや 東京キッド いきでおしゃれで ほがらかで
右のポケットにや夢がある 左のポケットにや チューインガム

(NA) 昭和25年、後樂園球場に夜間照明がつき、ナイターが始まる。

この年(1950年)3月、ひばりの小学校卒業の予定が仕事のための出席日数不足から危うくなる。しかし、どうにか卒業。中学に進む。このときから家庭教師がつく。

元家庭教師、板橋中央総合病院院長、**中村哲夫**。(1925-)

「勘っていうんですかね、やっぱり「頭のいい」ということに通じるのかな。

抜群な、理解度というか、持っていましたね。歴史とか、地理とかに非常に興味を持ってね。それをさかんに質問してきますよね。やっぱそれはただ単に興味というよりも

そういうことを知っておかなくちゃならないんだということだったでしょうかね。
だから私達の知らないところは、例えば金沢に行ったりなどしたら、そこの旅館のね、ご主人に来てもらって、ご主人からも、教わるように、していましたしね。それ非常にまた興味深くそれを彼女なりに記憶していたようですね。」

(NA) そして昭和 27 年 (1952 年)。この年、TBS でのラジオドラマ「**リンゴ園の少女**」(1952. 4.3 から 39 週放送) の主題歌がヒットし戦後レコード界の最高記録を樹立。

(当時 70 万枚)



(←左端に収録を見守る母喜美枝の姿がある。左から、望月優子、山形勲、美空ひばり、三島雅夫。ひばりを囲むのは当代の名優たち。TBS 秘蔵写真)



(※ ラジオドラマ「リンゴ園の少女」)

(→ 映画「リンゴ園の少女」1952.11.20 公開。松竹。
美空ひばり 35 本目の映画)

♪ **リンゴ追分** (1952.5.2。美空ひばり 14 歳。発売直後の 5.29 に 15 歳。)

作詞 小沢不二夫 作曲 米山正夫 (1912-1985 1952-1963 の 12 年間、美空ひばりにさまざまな名曲を作曲した)

リンゴの花びらが 風に散ったよな 月夜に月夜に そっと え——
つがる娘は 泣いたとさつらい別れを 泣いたとさ

(NA)この歌の大ヒットに乗ったひばりは東京歌舞伎座でやることになる。(1952.4.28)

この伝統ある劇場に少女歌手が立つことに対して、巷にはさすがはひばりという肯定派と、たかが少女歌手がという否定派があった。

この肯定派と否定派の両極端は、デビュー以来 39 年、今もなお彼女に付きまとっている。これがひばりを強くした。

評論家、加藤康一。

「我々も忘れもしないで昭和 27 年だったと思います。美空ひばり『独唱会』っていうのをね、歌舞伎座でやることにしたんです。それを、それにはね松竹に亡くなったお母さんが交渉をして、松竹としてはね当時美空ひばりの写真さえ出せばもう万来のお客が来るわけで、マネーメイキングスターのトップですからね、松竹は承知しましたと早速やりましょうということだったんですが、まあ、それを歌舞伎座に下ろしてみたらですね、

もう亡くなりましたけど吉右衛門(初代中村吉右衛門 1886-1954。二代目吉右衛門の祖父)さん、これが頑として『許さんと、冗談じゃない』と。『おお、いいよ』それなら、『ひばりだから知らだか知らないけども、小娘に舞台を踏ませんだったら、俺は出ねよ』ってこういう話になってね。

あわてたのは松竹でしてね、ところが、ほら、お母さんにも約束している松竹としては今更、いや実はいろいろあったけどあそこは駄目ですと他にしてください。国際劇場にちょっと代わってくれませんかってわけにいかないわけですね。お母さんにしてみれば、とにかくひばりをあの歌舞伎座の檜舞台に上げるということが、もう怨念だったわけですからね。」

「それでしょうがなく松竹側は吉右衛門さんとにかくこの独唱会が終わったならば、あの歌舞伎座の舞台を全部飽かけますと、で何とかそのとお願いして『じゃあ、そうかい』っていうのでやっと了承を得たんですね。本当に飽かけたんですけどね。」

(NA)この年、大学卒のサラリーマンの初任給は 4950 円。

年収にして約 6 万円。中学 3 年のひばりの年収は 1200 万円。

なんと大学出のサラリーマンの 200 倍もの収入があったわけだ。

評論家、加藤康一。

「だいたい普通の家庭ってのはね、経済的な責任も、それから社会的な顔もですね、全部父親をまず窓口として、家族が構成されてるわけですね。ところが、もうひばりがスターとして、誕生したことによってですね加藤家のね、顔も、それが経済的支柱も全部彼女なんですね。そしてその彼女を支えている嫁さんが、つまり言ってみれば、お母さんなわけですね。父親は、もういらぬいんですよね。結局弾き出される。弾き出されてしまったことで、つまり彼は、やっぱりなんていうかある種の劣等感に苛まれたりなんかして、そして全然別のところで別の形で亡くなってしまうわけですからね。そうやって当然だなというね、非常にこうふつうの親父さんでしたね」

(筑紫哲也) お母様の話が有名なんですけども、お父さんはそれに比べてね、あまり知られてないと思うんですけど(ひばり)短気なんです。両方とも気が強いつて感じなんです。お母さんは立て板に水でとつても話がうまいですね。もう口では負けちゃうんですお父さんがそうすると物が飛んでくるらしいんですね。



(↑1942年頃の加藤家。前列、左に美空ひばり、5歳。右、妹勢津子4歳。後列、父増吉31歳。赤子は弟、益夫。中央に母喜美枝、29歳。研究家、犬塚潔氏所蔵の未発表写真)

出刃包丁でも何でもお魚をやっていますよね。そういう時に何か面白くないことがあると、その、パッと出刃包丁が飛んでくるらしいんですね。で、お母さんがわっとよけますと、後ろの柱にぶっとささったりして。本当だったららしいですよ。だから母はね、よけるのがうまくなったよなんてよく笑っていましたよね。

(筑紫) お父さんは、お酒が強かったそうですね(ひばり)ものすごく強かったのです。お父さんはすごいですね。だからよく遅くまで飲みに行っていると「お母さんが迎えに行ったのじゃ、絶対帰ってこないからあなたたちが言ってちょうだい」って、お母さんにいわれてね、それで私と一つ下の妹(勢津子、1938年生まれ)と2人で暗い夜道を手つないでこわごわ迎えに行くのですね。今はお酒を飲む気分っていうのは自分で味わっていますからわかりますけど、なかなか帰ってきてくれないですね。「今いくよ、今帰るよ」っていうだけです。(笑いながら) お酒もものすごく強かったのです。お父さん、すごいですね、うん。で、こんなに子煩悩なお父さんが私たちの言うことを聞いてくれないのですね。お酒飲んでるときは。ですから、「こんな嫌なものってないな」と思ったのです。「お酒って。こ

の世にお酒がなくなればいいな」と思いましたね、子供のときは。
今はあった方がいいと思います。

(NA) 評論家、藤原勇。

「うん、まあ、寂しかったんだと思いますね。やっぱり自分の娘、嫁にやったって寂しいのですよね。ものすごくそれと同じでひばりのお父さんっていうのは、ひばりをお嫁にやったわけじゃないけれども、あの全部その芸能界に取られちゃったわけでしょ。ひばりと同時に自分の女将さんが取れちゃったわけでしょ。これはやっぱり寂しかったと思いますね。」

(NA) 昭和30年、マンボが流行し、街には、マンボスタイルの若者の姿が見られた。この年、雪村いづみ、江利チエミ、と美空ひばりが共演した映画「3人娘」が当たる。(美空ひばり18歳。11月1日封切り映画「ジャンケン娘」から三人娘シリーズが4本製作され、人気となる)

(NA) この頃から、彼女の母親のステージママぶりに批判の声が高くなる。

(筑紫) お母様の話っていうのは大変、それこそ、美空ひばりさんとの関係で言えば、さっきのその活字の話じゃないですけども、ずっといろいろ書かれましたね。(ひばり)「**一卵性母娘**」ってね、どなたがつけたのかと思うのですが、うまいことつけてくださって、こんな名前をつけられた親子は初めてでしょうね。(筑紫) そうでしょうね。ご自分でやっぱり似ているなと思われませんか。

(ひばり) お袋が下の茶の間でうちの子たちに用事を言いつけます。「歌のこと、こうこうこうしといて、これ、こうなのよ」って言いますね。そうしますと、2階で私がまだ付き人さんと呼んで、また同じことを言うらしいです。同じぐらいの時間に、イヒヒヒ。それで気持ち悪がられるのですね。そういうことがずいぶん度々ありましたね。(ひばり、楽しそうに) でも、もめるときあるのですよ、仲のいい親子でも。(筑紫) そうですか？(ひばり) 舞台のここの話になりますとね。やっぱり、私そんな恰好したくないとか、でもお袋の夢としては、「やっぱりこういう姿であんたに歌ってもらいたいわ」って。親子でディスカッションですね。そのときは**美空ひばりとプロデューサー**になっているわけですね。

(筑紫) なるほどね(ひばり) なんだか知らないですけど、それでどっちにしても私の思い通りにさせてもらいますけど。(ひばり、笑う)(筑紫) そうですか。最後は美空ひばりのほうが勝っちゃうんですね。(ひばり、笑いながら) ええ、勝つんですね。

(NA) 女優、**清川虹子**(1912-2002 喜劇女優)。

「ほんとにね、ひばりちゃん親子は一卵性親子だねっていう言葉なのです。それがいつの間にかみんなに広がってね、いまだに言われているでしょう。まあ、まるで本当にもう親子っていうか双子の兄弟。それも一卵性ね。偉大なお母さん。それから、偉大なお母さんから生まれた偉大な歌手。日本のね、みんなを戦後、ずうっと励ましてくれたひばりちゃんって偉大であるし、お母さんも偉大だから一卵性がちょうどいいんじゃないの。ね。」



(NA) テレビプロデューサー、小桜英夫。

「確かにうるさいのだけでも、そのうるさいのが、どこで口出しするかってことよく考えてみるとね、非常にやっぱり自分というものをしっかり持っている人だっていうのが僕の印象なのです。例えばこれ非常に具体的な例ですけども、ある時ひばりさんと日本舞踊の**西川右近**(1939-2020)さんと2人で「春夏秋冬」という日舞を踊ってもらうシーンがあったんですけどね。それを録画撮りしているときに、ひばりさんのお母さんは、ディレクターである僕の後ろの席にどんと座ってですね、リハーサルときに『今度のカットは左から取った方が綺麗よって』なんてことをズバツと言うんですよね、考え方によっては、ディレクターのその演出にまで注文を付けるっていうんで、非常に反感を覚えるようなことなんだけど実際にそれじゃ左から取ってみるとどうなるかという、実に素晴らしい絵ができる。だからそういう意味ではあの人単にその娘かわいさとかね。そういうことを超えて、やっぱりひばりの芸というものに対しては、最高のやっぱり鑑識眼を持っているって、逆にそれを認めないで、母親とぶつかるってね。あれほどやっぱり口うるさくて、傲慢な人はいなかったっていうのが僕の印象なのです。」

(NA) 昭和 34 年、皇太子結婚。美智子さんのご清潔、ご誠実が、ときの流行語となる。もう一つ、「曲がり角」という流行語もまれた。安保論争が次第に激しさを増し、日本そのものがある曲がり角に立つ感があったからだ。この昭和 34 年から翌 35 年にかけては美空ひばりにとっても、ある曲がり角だったといえる。(美空ひばり、22-23 歳)

届けられるファンレターは 3 分の 1 に減った。3 分の 1 といっても、毎日 300 通も来ていたのが、100 通になったのだ。この数の違いは大きい。

昭和 37 年、25 歳で結婚。(→結婚式映像より。11 月 5 日、**小林旭**と結婚。小林は 24 歳。)



同 39 年離婚、この間に父親に死なれている。(加藤増吉。1963 年 2 月 1 日、死去。51 歳)

(筑紫)ま、人間の話でいきますと、もう一つ、女性の場合には「男」というのはあるわけですけど、それはどうですか。(ひばり、ええええっと笑う)

(ひばり)筑紫さんからご覧になってね、美空ひばりって、こういうふうに話して下さっていて、どんな雰囲気を持たれているのかわからないのですけれどもね、何か男の人たちの中でも「美空ひばり」って可愛い女だなあっていう、なんかそういう感覚で持たれちゃっているから、私の方から積極的に相当迫ってアタックしていかないと男性がその気になってくれないのじゃあないかっていう不安はありますね。ただし私って割とそんなにはアタックうまくないので(ひばり、へへへと笑う)

(ひばり)私なんか、あの、用心されなくて、「普通の女の子の感覚」で付き合ってくださいっていうことを男性に、今私が求めるのはすごく無理なことかなと思うのですね。でも最近、「怖い」という言葉は、他の意味のことだけであって、仕事をしだしたら、あたしって人間は変わるっていうことだけです。仕事をしているときにはちょっと近寄れない、「怖いから」っていう感じであって、仕事を抜きにして、私生活に戻ったときには、この頃、友達でもみんな「かわいい女の子だなと。やっぱり女だな」っていうのは感じて来てくれた人も、数は増えてきましたね。(「えへへ、ひひひ」とひばり、笑う) 徐々にですけれど

(筑紫)ただ、何て言いますか、芸能界とかそういうところで、非常にスターになっている女性っていのを遠くから眺めていますとね。相当な部分、実はその人は男じゃないかっていう感じがするのですね。(ひばり、はあはあとうなずく)(筑紫)そうすると多分、家に帰って必要なのは「奥さん」であってね、うん。つまりくたびれて外でいろんな顔して帰ってきたときに物も言わないでもう「お茶飲みたがっているな」っていうときにお茶が出てくるとい存在が要るわけですね。(ひばり)ですから、もう私達の立場から言わせてもらおうと、旦那さんより「奥さん」が欲しいっていう感じは時々ありますね。うん。でも、私はやっぱり男っぽい人が好きですかね。(元素材では「だから、難しいですね。」とひばり、しみじみと続けている)

(ファンの声)『七色の声』が魅力だと思ってんの。『七色の声』。それがいいと思って公演に来ている」「たいていの人が一時的な人気で落ちるでしょ。その人気落ちないんだもの」「私は細川たかしだったら、来ないよ」「今度、NHK 出られなくなっちゃうでしょう。もう寂しいってことないですよ」「もうなんだかいても、世界の女王様だからね」「もうお客様に良くしてくれるところが良いと思いますよ」「美空ひばりさんとなったら、もう来なくちゃいけないですよ。」

(NA)こうしたファンの熱意に応えるように、ひばりは演歌をじっくりと歌い続ける。それかあらぬか昭和 40 年のレコード大賞曲「柔」に続き、41 年もまた大ヒット曲が生まれた。

♪ 悲しい酒

1966年6月10日発売。美空ひばり、29歳。作詞石本美由紀、作曲古賀政男

ひとり酒場で 飲む酒は 別れ涙の 味がする
飲んで棄てたい 面影が 飲めばグラスに また浮かぶ

(筑紫) ああ、先ほどファンというか、お芝居見に来たり、歌聞てくるお客さんのことをおっしゃっていましたが、最近では本当に若い歌手で嘘泣きしたりして有名な人(松田聖子は1980年9月の「ザ・ベストテン」で「青い珊瑚礁」が一位を獲得。涙声での歌唱となったが、涙が出ていないなどと揶揄された。その後、「ウソ泣き」の場面が度々指摘された)がいたりしますが、ひばりさんは本当に涙が出ちゃうんですね。(ひばり、笑いながら) ええ、そうなのですね。ただ私がお客につられて、悲しい歌を歌って涙ぐんできますとお客様がパチンとハンドバックを開けて、ハンカチを出されてこの涙を拭かれる。その姿が私の眼の中に入ってくる。そうするとまた私の気持ちが盛り上がりまた泣けてしまう。お客様と私との(筑紫) ふんふん。(ひばり) 行ったりきたりですね。涙の。(筑紫) ふんふん(ひばり) ただ、プロとして一番気をつけなきゃいけないと思っていることは、涙は流してもいいんですけど、歌が崩れては(筑紫) ふんふん(ひばり) プロじゃないと思うんですね。よく泣き出しちゃうと、歌わないで止まっちゃう人がいますよね。うん。あれはもうプロとして失格だと私は思います。ですから、私はもうこの頃、目から出るより鼻の方にどンドン流れていくことになりまして、大変に複雑な状態になるのですから、それでもやっぱり歌やめることはできないので(筑紫哲也) ふんふん(ひばり) 完全に歌い上げますけどね。それは美空ひばりの責任だと思って、それだけ頑張るのですね。例えば、私の歌の中で特に大事な歌ですけれども、「悲しい酒」(1966年6月発売、作詞石本美由紀、作曲古賀政男)というのは私の中ではじっくりと歌わせてもらう歌なので、「悲しい酒」のイントロがギター一つで始まりまして、♪ひとり酒場で飲む酒は・・・まで歌ったときに例えば、コトン、カラカラと缶が転がる音とか、赤ちゃんが泣いてしまったり、何か声がしてしまったりする状態になったときはですね、他のお客様には大変申し訳ないのですが、そこで歌やめるのです。一時。(筑紫) ふんふん(ひばり) そして、私のお話が始まるわけですね。その説明をさせていただいて、私にとって大事な歌を皆さんにじっくりと聞いていただきたいので、もう一度、「その赤ちゃんが出るまで待ちましょう」って言ってあげるのですね。そうすると親御さんは、「悲しい酒」を聴きたいのにこの子のために私は出て行かなきゃなんないって悲しそうな顔なさって出ていかれますけど、その出ていくのを見定めて、それからイントロ始めてもらうわけです。



(NA)昭和 40 年からは音楽が変わってきた。新しいリズム、新しい歌手が次々に生まれ、若者たちはその新しい音楽に向かって走っていく。そうした中で・・・

♪ 真っ赤な太陽 1967 年 6 月発売 美空ひばり、
30 歳 作詞吉岡治 作曲原信夫

真っ赤に燃えた太陽だから 真夏の海は 恋の季節なの

(筑紫) その歌のお話にまた少し戻りますけども、なんていいますか、「演歌」といいますか、その「ひばり節」と言われる歌の世界のところから時々外に出ていくといえますかね、「真っ赤な太陽」(1967 年 6 月、作詞吉岡治 作曲原信夫、演奏ジャッキー吉川とブルー・コメッツ) なんていうのが一番いい例だと思いますけども(ひばり) あれは歌った時はファンの方もびっくりしたそうですね。当時、やっぱり。でも、とは思っているのですね(筑紫) はあ、そうですか(ひばり) ええ、誰かが作ってくださらなければ、歌い手としては歌えないのですけども、そろそろ欲しいですねああいう歌が。なかなか美空ひばりの歌の中には寂しい歌が多いですね。(筑紫) そうですね(ひばり) やっぱり、

「人生美空ひばり」は、とても寂しいのですから(苦笑しながら) 歌ぐらいは楽しい歌を欲しいと思っているのです。

"

(街の声) 「やっぱり 50 は 50 の女性の良さっていうのもあるでしょうし、60 は 60 の良さっていうのもあるかもしれないですよ。いつか、ロックみたいなやつを歌ったこともあったかもしれないけど、どちらかっていうとやっぱりしみじみした歌の方があうんじゃないんでしょうかね。」『真っ赤な太陽』というのは新しい試みでしょ、あれはね、またあの歌はいいんじゃないですか。「僕らと同じ年齢なんだからね。やはそういう人たちのハートをです、持続する歌がいいんじゃないかな。」「美空ひばりはこぶしのきいた歌がいいんじゃないですか。」

「ちゃんと歌っても演歌になっちゃうでしょ。やっぱり自分の歌ってことになるから、そういうのをやって、やっぱり歌っていた方が一番向いてるんじゃないでしょうかね。」

(NA) 評論家、藤原いさむ



「やっぱり、ひばりはあの『真っ赤な太陽』を歌うとやっぱりひばりの『真っ赤な太陽』なんですよね。他の人があの歌を歌ってもあの曲というのは生きなかったと思うし、それはそれでいいと思うんだけど、あの線ばかりで行ったんじゃ。やっぱり、昔からそのひばりファンっていうのはやっぱり『ひばり節』っていうのをね、待望してるんじゃないかと思うんですよね。だから、その辺のところが違うなという気はしましたね。だからそのひばりの本当の本来のひばりっていうのをバイブレーションにしてもね、あの歌い方にしても、あの人独特の歌ありますからね、それはそれで大事にしてもらいたいという気がしますね。」

(NA)昭和48年、ハイセイコーの活躍ぶりが人気を呼ぶ。また、石油ショックのあおりでトイレットペーパーが街から姿を消し、買い占め騒ぎが起きる。そして美空ひばりには劇場を締め出されるという事件が起きた。

(1973年1月、「暴力団追放キャンペーン」の中で、山口組の構成員とされた弟**かとう哲也**の共演を巡って、「美空ひばりショー」の公演を中止する動きが全国の公会堂で相次いだ)

(筑紫) あのお・・・(何か言いにくいことを切り出そうとする感じ) あれですね、美空ひばりさんっていう人は、例えば肉親に対する愛情っていうのは非常に強くて、で、そのために例えば「**劇場の締め出し問題**」だとか、いろんな目にあってですね、そこでもあの、断固、絶対家族っていうものを優先した・・・世間の評価とかですね、そういうことではマイナスに決まっていることだったのですね。(ひばり) そうですね。(筑紫) 非常に古い話のようですが、特に、その一、兄弟に対するかばい方というのは、よく「異常じゃないか」っていう。それはご自身ではどうもなぜだと思えます。

(ひばり) **異常ですねえ**。なんでそういうふうになったかっていうともう自分としてはものすごいハンデを持っていたっていうのですかね。(筑紫) はあ、はあ(ひばり) お母さんを自分が独り占めしてしまって他のあとの3人の兄弟に不自由をさせてしまった。お母さんの愛を与えてあげなかった。私が独占してしまったのですね。だから、やっぱり、その、幼い頃から、もし自分が反対、逆の立場だったらどんなだったろうって。寂しいだろうなって。(筑紫哲也) ふむふむ

(ひばり) だから私はこれだけ一応有名になって稼げるようになったのだから、あんたたちのさみしさは今、私が少しずつお返ししてあげるわね。ていうような、なんだかもすごい今の言葉だと、きれいごとになっちゃいますけども、かっこ良過ぎちゃいますけど、でもそんな気持ちが長女和枝にはあったのですね。ただ、あの兄弟たちにいつも話をするのですけれども、その姉さんのその気持ちをね、当たり前前に受け取られると、非常によくないと思うのですね。

だから、お袋がいなくなった今、母は、大変に素晴らしい、美空ひばりのプロデューサーとしては素晴らしい母であったけれども、やっぱり長女美空ひばりだけを完成させた母であって、あとの3人の子供たちにはやっぱり愛を伝えなかったために完全に完成はしてないのじ

やあないかなと私は長女として言えますね。(筑紫)はあはあ。

(ひばり) お袋が聞いたら泣くでしょうけど、でも私がお袋に対してただ一つそれだけは、お袋の「失敗」だったのじゃないかなとは思いますがね。

(筑紫) というよりは、一方でのあまりに大きい成功の代償みたいなものですね。ただ、その、これまた本当にはたから見ている感想ですけども、そのひばりさんがそれだけ自分の兄弟に対していろんなものを注いでいる。にもかかわらず次々と問題を起こしたりすると、それはその、兄弟の方たちはひばりさんのその気持ちはどこまでわかっているのだろうか、通じているのだろうかというね。疑問は当然出てくると思うのですけどね。それでもやっぱりひばりさんとしては、これは償いきれないという、そういう気持ちで・・・

(ひばり) もう、でもお袋がいなくなったあのときからですね、もうそれぞれあのお袋にお別れをしたときに、もうひとりずつ、自分で決心をしてなきゃいけないかった。あのときから決心してひとりで生きてくのだ。これからも兄弟の、姉さんの力でなく、自分だけで生きていかなきゃいけないってことをあそこで感じ取らなければいけないと思うのですね。それぞれですから、今私は冷たいようですけども、もうひとり弟(香山武彦、本名加藤武彦。1943年生まれ。俳優、歌手。このインタビューの一年後、1986.4.1急性心臓不全で逝去。享年42)がありますが、その弟のことも、もう知らん顔しているんです。

(NA)評論家、風間智彦。

『いじめられた、苦勞した、泣いた』というのがね、これがね、ひばり家のね、三家言なのね。つまり、この被害者意識が、すべてね、何かあると全部世の中が私たちをいじめたね私達は泣かされているんだ、そういう被害者意識がね、このまた、ひばりファミリーを結束させる一つの大きな要素になってきたわけね。その辺がね、非常にこれは特色なのね。うん。」

(NA)評論家、加藤康一。

「これはもう普遍的なことなんだけど、一つの家庭にね一人のスターが生まれると、一家はある意味で崩壊します。つまり一家の家長はその家の娘になるわけで、父親のいる場所がなくなってなくなってしまったりする。どの家庭にも見られるんだけど、後年言われるようなね、『一卵性親子』というふうな関係ね、そしてその弟たちが、ある意味で犠牲になるわけですから、つまり、お姉ちゃんが全てのことがお姉ちゃん中心に動くわけでしょう。当然多感な頃ですね、弟たちがですね、やっぱりほら、ひがみっぽくなりますよ。それかばってやろうという形のかばい方ってのはね母親にしてもあれにしても、その弟たちを全面的にね、かばいきっちゃうしかないわけで、だからどうしたってね、血の繋がってるのは強くなるわけね。」

(筑紫) 一つは今までいろんなことをご自身で喋ってないのはお母さんがそれこそ一卵性親子でスポークスマンをずっとやっていたわけですね。(ひばり) 結局後でわかって、

全然私が思っていないことを話してくれていたのではなくて、確かに私がお話したいことをおふくろが代わりに言ってくれたのですけれども、やっぱり受ける側としては「本当にひばりちゃんがね、こういうふうに思っているのかな」っていうことがありますね。ですからやっぱり本人から直接に伺った方がいいということになって、やっぱりそういうのは大切なことだなと思ひまして。お袋が癌ということを宣告されて、本人には亡くなるまで知らせなかったのですけれども。

(筑紫) はあ(ひばり) そのときにやっぱり私に歌をやめないようにね、お母さんがその時期をね、大人になって皆さんと、ちゃんと自分が歌うためにお話できて、ちゃんとそういうコースで歩んでいけるような時間を、何か私にくれていたような気がするのですね。その時期に。ですからいきなり「癌です」と言われてそれで、ほっとお袋がこの世からいなくなってしまうたら、私は今みたいに早くは立ち直れなかったのではないかと思うのですね。その時期ずっと時間をもらえたので、その間に、まあ再発しなければいいなど。ということだけを願いながら歌っていましたから。その間に徐々にひとりでやんなきゃいけないのだな、これもお母さん家で寝ている。私は決まった仕事は「美空ひばり」として立派に果たさなければいけない。ということのこの時間がとっても良かったと思ひますね。ですから割と、「あっ、ひばりちゃんお母さんいなくなったら、歌をやめちゃうのではないかな」っていう方がもうほとんどでしたから。

(母、加藤喜美枝、1981年7月29日、転移性脳腫瘍にて死去。享年68。インタビューの4年前である)

(筑紫) ご自身もやっぱり？(ひばり) ええ、私もやっぱり歌えないのじゃあないかなと思ひう時期はありました。(筑紫) そうすると亡くなられた直後というのは、やっぱりご自分もやめようっていう気持ちを多少・・・？(筑紫、語尾消えるように)(ひばり) そうですね、やっぱり、そして、そのお袋の代わりにバトンタッチをして、自分ができないながらもお袋から教わったことをね、土台にして頑張るといふことで、また再スタートしたわけですね。

そしたら、また「追い込み」をかけられまして、今度は弟を失ってしまった(1983年10月24日、かとう哲也こと加藤益男逝去。急性心不全。享年42)わけですから、

(筑紫) ふん、ふん。

(ひばり) 本当に一人になってしまったということでもう私の気持ちの中には少し開き直っているような。私にはこれしかないのだから、こんなに次から次と美空ひばりをいじめるのだったら、美空ひばりだってこれに反抗していこうじゃないか(筑紫) ふん、ふん。

(ひばり) 好きな歌を自分で選んだのだからこのために私はどうしたって、死に物狂いになつたってやっていかなきゃいけないのだっていふふうに、何か一人で泣いて一人で解決しちゃったみたいなそんな感じですね。(しみじみと)"

(NA) そして誰もいなくなった。たった1人になった美空ひばりは、夜遅く寝室で焼酎を飲みながら、母の写真に何時間も語りかけているという。

(筑紫) 美空ひばりさんがお酒を飲み始めたのはいつ頃ですか？

(ひばり) そうですねー。(考える) ちょっと生意気に一応世の中の人に「美空ひばり」ってわかってきてもらえたなっていう意識を持った年頃ぐらいじゃないですかね。はい。

(筑紫) で割合、幼児体験みたいなものがさっと変わってお酒のほうにいったのですね。

(ひばり) ええ、そうですね。お酒っていうのはずるいかもしれないですね。(強く言い切る) お酒飲んでしか言えないなっていうことは、ちょっと卑怯だと思うんですけどね。でも何かものすごく普段言えなかったことがその人に伝えられるという部分ではすごく便利なものだと思うんですけど(筑紫) ええ、そうですね。

(筑紫) あの、ずいぶん、本当に来年で40年になるのですか。(ひばり) ええ、はい(筑紫) 本当に信じられないですね。つまり今年が戦後40年ですから、戦後の歴史っていうのはそのまま美空ひばりさんの歴史みたいな。本当に長いものだと思いますけども、よく「歌は世につれ世は歌に連れ」って言いますが、作家の井上ひさし(1934-2010)さんという人がいて、奥さんの井上好子(1940—、このインタビューの翌年、井上ひさしと離婚。現、西館好子)さんという奥様がいるのですね。この人が今ね、私たちの年代の、簡単に言えば中年ですね、「中年の女性がなんでこんなに強いのか」っていうのは、「これは美空ひばりの歌のおかげだ」という名言を言ったことがあるのですね。(ひばり) ええ、そうですか？

(筑紫) ただ世の中も非常に変わりました、例えば「演歌」だとかというものが、それほどいろんな広い人には受け入れられなかった時期があったり、それからまたそれを盛り返したり、とかいろんな変化があったと思うのですね。こんなに長いこと「美空ひばり」という人が支持されてきたっていうのはご自分ではなぜだと思いますか。(ずばりと聞いている)

(ひばり) (つぶやくように小さな声で) ええ、どうなのですかね。やっぱり「嘘つきじゃないから」、かな。だと思ふのですね。「自分にもものすごく正直だ」と自分で思っていますから。

(筑紫) うん、うん。(ひばり) だから、私というのは本当に何か歌いたくないと思ったら、そんな気持ちでお客様の前へ出て歌っていたら、そのまんまお客様に受け止められてしまうと思うのですね。「私は歌が好きなの、私を歌わなきゃいけないの」っていうこの正直な気持ちのまま歌っているので、皆さんがやっぱり、受けとめてくださいじゃないかなと思うのですね。だから、あのそういう楽をしたいとか、自分はただちょっとだけ出て、他の人に任せてもくたびれちゃったから、出番を少なくしたりして曲目も少なくしたりしてそれで何とかやってみようかなっていう気持ちに、もし私の中にもしそういうものが芽生えてきたら、潔く受け止めなければいけないのじゃあないかって思うのですね。

お客様に対して、そんな気持ちでマイクの前に立ったり、お芝居をしたり、することは卑怯じゃないかと自分で思っていますからね、すごくお客様に正直な美空ひばりを見てもらう

限りは、やっていく自信はあるんですけど。"

(NA)ひばりに憧れ、ひばりを目標にして歌手になったものは、今までに何百人といたことだろう。かつて、「今に、あの美空ひばりのように」と歌手になった**都はるみ**も去年の暮れに歌謡界から身を引いた。(1984年3月、「普通のおばさんになりたい」と言って芸能界を引退)

(筑紫) ひばりさんの場合にはそういう場っていうのは、まだ当分、いや当分というかずつとないだろうっていう・・・

(ひばり) そうですねできれば。やっぱり私にはこれしか今のところ見つからないんですね。もう歌を取ってしまったら、私としては何もない。ただの本当にただの女になってしまうので、それは今、現在恐ろしいなとは思っています。そうなったときの自分がそうなったときの自分が、さあ今度何を見つけて生きていかなっていうことで、今、私の中には計算が立たないですね。だから生きてくことに努力をしなきゃいけないと思うんですけども。とにかく、**時々『死にたい』なんてお袋がいなくなったときとか、そういう袋が病気のときとか**っていうのは、(筑紫) ひばりさんの場合には、ああいう場面っていうのは、まだ当分、当分というかずつとないだろうっていう(ひばり) そうですね、できればやっぱり私にはこれしか今のところ見つからないのですね。私という人間は、いつもお話しているんですけど、つぶしがきかないのですね。ですから、歌をやめたら、例えばひょっとしてこれだけ喋れるようになったのだから、そういうお喋りだけしているお仕事に移ってみてもいいなと思ったり、(「はあ」と溜息つきながら) 芸者さんになった方がいいかなと思ったり、今じゃないのですよ、昔ですよ。(筑紫、わかっていますよという感じで) はい、はい。(ひばり) そうすると友達曰く、お嬢みみたいな人が芸者さんになったら商売にならないっていうのですね。「なんで」って聞くと「だってお客さんを選んでいたのじゃ、駄目だから。あなたは選ばれる方の商売なのね。あなたの方でお客さん選んでいたのじゃ駄目だし、好きなお客さんのお座敷しか行かないだろうし」っていうことで、それもどうも私合わないみたいだし、もう**歌を取ってしまったら、私としては何もない。**

ただ本当にただの女になってしまうので、それが今、現在、恐ろしいなとは思っています。そうなったときの自分がそうなったときの自分が、さあ今度は何を見つけて生きているかなっていうことで、今、私の中には計算が立たないですね。死んでしまうというのは大変に卑怯なことですからね。だから生きてくことに努力をしなきゃいけないと思うんですけども。とにかく、時々「死にたい」なんておふくろが亡くなったときとか、そういうお袋が病気のときとかっていうのは、「死にたい」なんて馬鹿なことを考えたこともありましたけどね。

(筑紫) はい、しかし、そのお母さんのことを乗り越えられて今こういうふうになっているとすれば、これはもう一生ずっと歌い続けていられるより、他に道はないっていう感じはし

ますね。(ひばり) そうですね。本当に私の歌の中に「これからも頑張って羽ばたいて歌って
くわ」っていうふうにマイクに向かって叫んでいる美空ひばりが、決してかっこよくって言
っているんじゃなくって、「私はこれしかないのだから頑張るのですよ」っていう意味なので
すね。だから「皆さんに歌を聞かせてあげているのよ」じゃなくて、「私はこうやって歌って
なきゃ駄目な女なのよ、皆さんわかってくれる」っていう感じですね。今、私がマイクに向
かって叫んでいることは、そういうことだと思いますね。"

(街の声)「戦後のね、あの混沌とした時代を思い出すんですよ。笠置シズ子(1914-1985 終
戦直後、「ブギの女王」として一世を風靡)のブギウギ歌って出てきたっていうのがね、あ
の人のイメージなんですよ」「戦後の日本をね、あるいは戦後の日本大衆文化というものを
作り上げた人。そういう人だと思います」「天才的な才能があるんじゃないすかね。」「それ
だけ、長続きするってことはね、やはり当人が、非常に努力もしているということでしょう
ね。」「やっぱり私は非常にかわいがったもんだからね、やきもちやいたことあったよ」「一
人の人として見てね、幸せだったかっていうと、どうかなって考えますけどね。(小林) 旭
さんとね」「結婚をするときに、ひばりさん、目に涙をいっぱい溜めてね、清川ママ、ママだ
って恋をしたことあるでしょ。」「その社会では女王さまかもしれないけど、家庭的には家庭
的って人間的にはね、ちょっと悲しいんじゃないかな」「取り巻きがいっぱいついてんじ
ゃない。取り巻き連中ってのは昔からはひばりさんにくっついてりゃいいわけで、この際そ
ういう取り巻き連中も整理しちゃってさ、本当に一人になっちゃった方がね、自分の周りとか
自分の何てかな、姿がよくわかって、いいんじゃないかな。」「僕もね、ずいぶんひばりさん
を叩いたけれどもね、ひばりさんという人を嫌いで叩いたわけじゃない、もっと惚れすぎて
るもんだから、逆にやさしく言えないという優しい言葉が言えないというそういう感じの
人ね」「まだ生き残りの作曲家のひとりがいるわけですからね。もしひばりさんがですね、
おふくろさんの代わりに僕がなんでも役に立ったらですね、大いに手伝ってあげたいと思
いますね。」「変な妥協しないでね、人が何て言おうとやったらいいんじゃないかなって気は
しますけどね。」「私はこうやって歌ってなきゃ駄目な女なのよ。皆さんわかってくれるっ
ていう感じですね。今私がマイクに向かって叫んでることは」

♪ 歌は我が命 作詞 吉田旺 作曲 井上かつお

この次、この世に
生まれたときにも やっぱり私は
歌っているだろう 昨日の悲しみ
心に うずめて
歩こう 自分で
選んだこの道

(NA)人間 50 歳ともなれば、その人生にいろいろなことを経験する。
涙もあれば笑いもあり、美空ひばりとて変わりはない。
しかし、悲しいとき苦しいときに泣くのは誰にでもできる簡単なこと。
それから先に、その人間の価値が生じる
今、ひばりは歌い続けようとしている。
歌は自分の命とさえ言っている。
なら喜びも涙も歌に託して、彼女は歌い続けなければならない。
そして、その歌を多くの人々の心の中に残してほしい。
美空ひばりは永遠の女王となりうるのである

...

出演、美空ひばり、筑紫哲也
構成 城裕介、ナレーション 中西竜
取材協力 川口松太郎、服部良一、中村哲夫、藤原勇
風間智彦 加藤康一 清川虹子 小桜英夫
インタビュー 宇野淑子 取材 大谷慧
調整 木村雅俊 ディレクター 佐竹公平 プロデューサー、吉沢博

この番組はゴリラの物置、末広工業の提供でお送りしました